

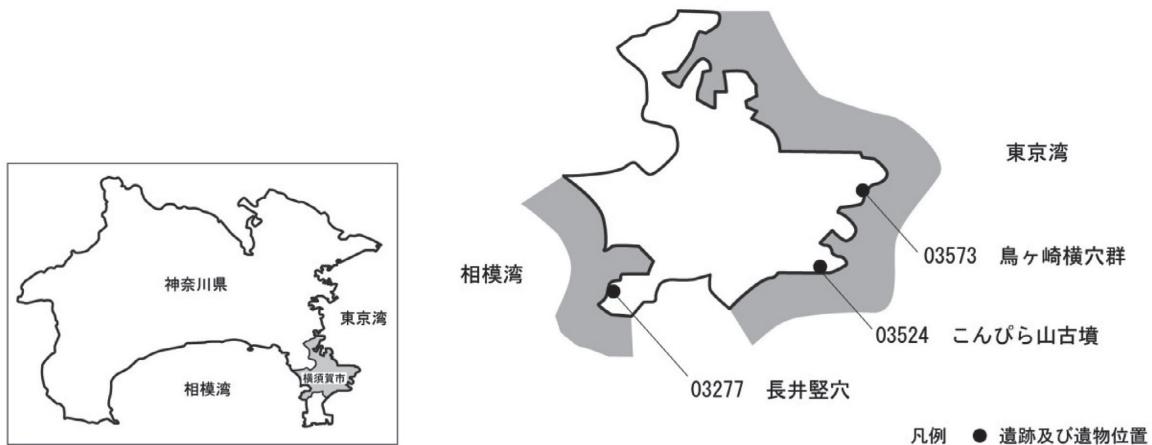
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（15）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第23号には横浜市域の12268-1（継続掲載）、横須賀市域の03227・03470・03573番を掲載している。横浜市域の位置図については紀要18を参照されたい。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜市12268-1：植山英史、横須賀市03227：新山保、03470：長澤保崇、03573：吉澤健が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は[調査（踏査）年月] [資料保管場所] [記載内容概略]とし、2. は[（遺跡及び）遺物（遺構）概要] [掲載図書] [掲載図書概略] [小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号横浜市 01268-1 瀬戸ヶ谷古墳（8） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

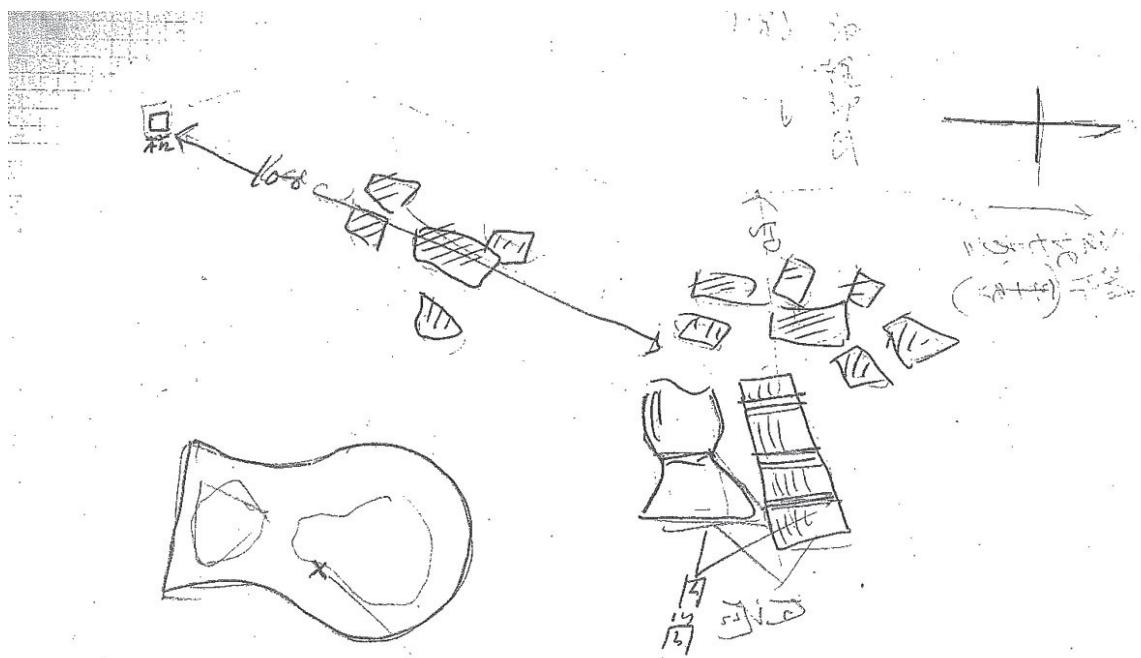
[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート8]

前回から引き続き今回は01268-1（3）の方眼ノートの記載内容について取り上げる。方眼ノートには、埴輪の出土位置と出土状況などが書かれている。前回は墳丘後円部の西側に並んだ人物埴輪、器財埴輪、円筒埴輪の位置と出土状況の頁を紹介した。今回もその続きの頁を見ていくことにする。

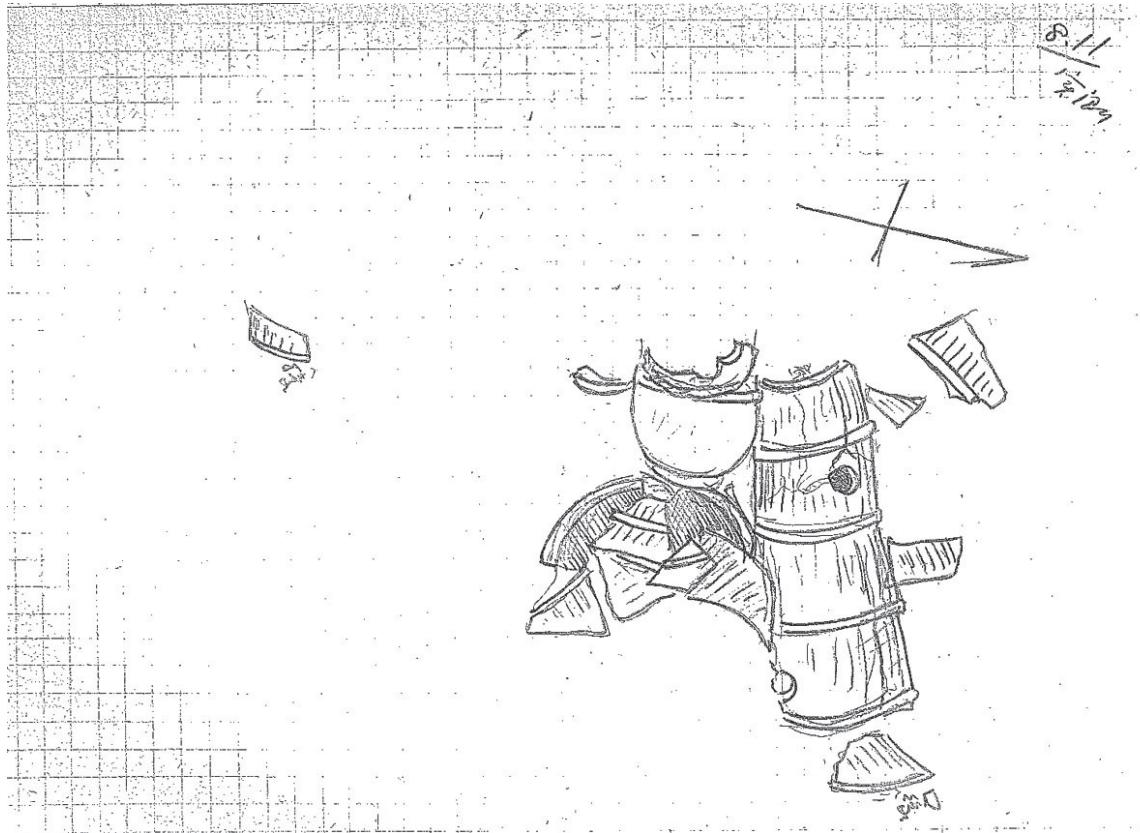
前回の図の一部には（昭和）18年8月1日と記入されていたが、今回紹介する第2図にも右端に8月1日の記載が認められる（図は上を右横方向にして掲載、以下同）。古墳の概略図が右下に記され、後円部東側の前方部に延びる墳頂部端付近に×印が付けられている。

左から中央には埴輪片の出土状況の概略が描かれている。貢中央には円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、当時設定したと思われる杭から100cという記載が見え、100cmの距離だと考えられる。また、右側に50という記載があり、先に文字が書かれているが現状では不明瞭で、この数値に関わる記載であるか判断し得ない。古墳の概略図の×の位置から考えると、墳頂部端からの距離を示したものもあると思われる。

次頁の第4図は貢左上端に「8.11実測」の記載が認められる。円筒埴輪と朝顔形埴輪の出土状況が描かれている。円筒埴輪、朝顔形埴輪の出土関係、方位等から第3図で示した出土位置図の埴輪を実測した図であると考えられる。



第2図 東側斜面埴輪出土位置



第3図 東側斜面埴輪出土状況（実測）

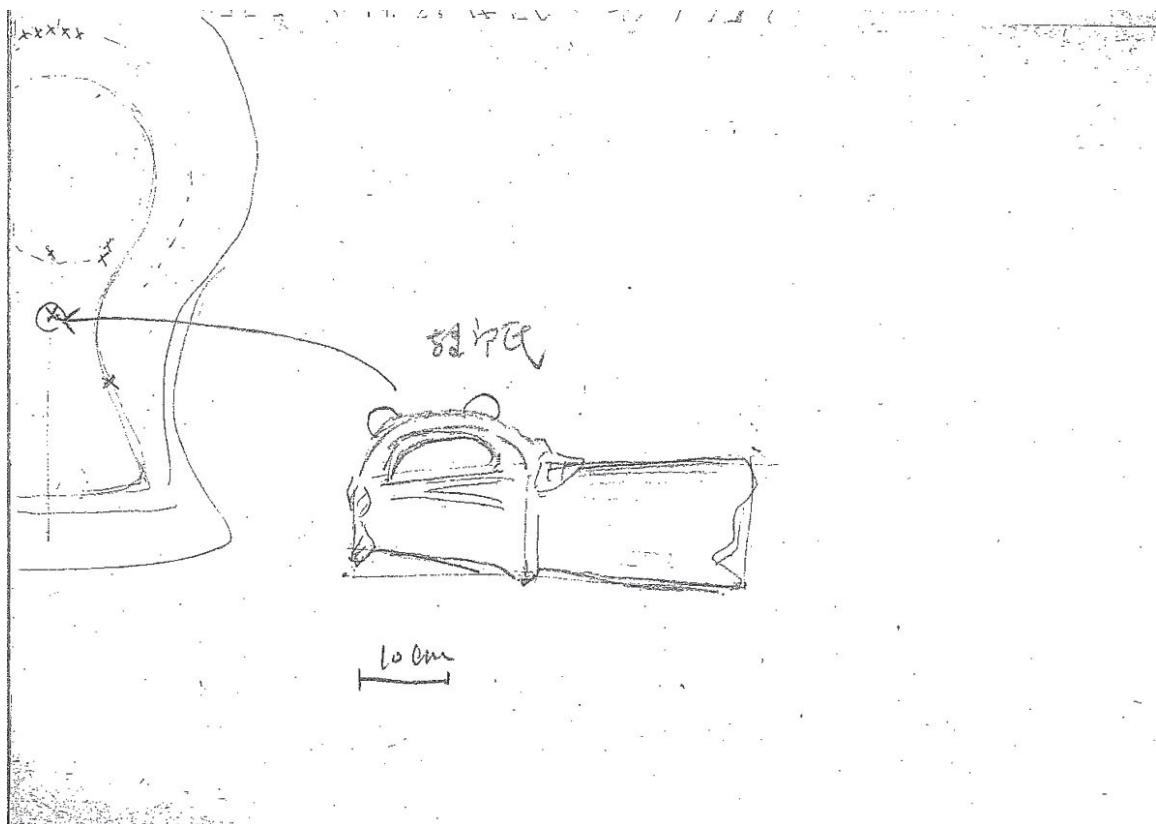
図には埴丘側から埴裾側に向かって倒れた状態の円筒埴輪と朝顔形埴輪が描かれている。円筒埴輪は3条の突帯が巡り、下から2段目と4段目に円形の穿孔が描かれる。残存する最上段の突帯より上は破損しているが、その上方に書かれた破片は形状から口縁部と推定される。底部側は平坦に書かれていることから、割面ではなく底部が残存し露出した状態が描かれていると考えられ、復元すると4段突帯で円形の透孔を2段目と4段目に持つ円筒埴輪であると考えられる。

この円筒埴輪の南側（前方部側）に描かれている朝顔形埴輪は、円筒埴輪と同様に上部が埴裾に向いている。朝顔部は破損しているが、破片に突帯が描かれており、朝顔部に突帯を有するものだということが判る。形状は丸みを帯びて立ち上がっている。朝顔形埴輪の円筒部は上段のみが残存し全容は不明であるが、上段は半球形状を呈し朝顔部へと接続する。

さて、これらの詳細な出土状況図は瀬戸ヶ谷古墳関係の資料の中で紀要12・瀬戸ヶ谷古墳（1）で紹介した、写真6（台紙1）の円筒埴輪の出土状況写真と極めて類似している。同台紙には「横浜瀬戸ヶ谷古墳（戦前）」の記載がある。紀要12で明らかにしたが、台紙の「昭和19年頃」「（戦前）」という記載は、調査の時期を示したものであると考えられることから、時期的にも合致する。

写真では図で書かれた円筒埴輪は、ほぼ図と同じ状態であり、朝顔形埴輪は朝顔部の破片が取り除かれ、土に埋もれた状態で残存する部分が撮影されている。撮影方向は手前に円筒埴輪、後ろに朝顔形埴輪が写っていることから、後円部側から前方部側に向けて撮影したものであろう。

改めて資料作成の時系列を整理すると、第2図の出土位置図の作成が昭和18年8月1日、第3図の出土状況の実測図作成が8月11日、そして紀要12に紹介した写真6（台紙1）の写真的撮影がその後になり、



第4図 後円部から前方部間埴輪出土位置

これも昭和18年の調査時の撮影と考えられる。

第4図は後円部から前方部にかけての埴輪の出土位置と出土した埴輪の図である。丁度古墳の主軸上に×印が記載され、大刀形埴輪の一部が描かれている。大刀形埴輪は柄部が残存しているが、上部、下部とも欠損している。下に10cmのスケールが手書きされており、残存長は約30cmであることが判る。

2. 記載内容の整理

先に述べたように今回紹介した第2図、第3図の円筒埴輪、朝顔形埴輪の出土状況は紀要12で紹介した写真と合致することが判明し、昭和18年の調査時における後円部東側の埴輪の出土状況がより明確となった。また、第4図では後円部から前方部に向けた個所で大刀形埴輪片が出土していることが描かれており、前回の後円部西側の出土位置図と合わせて、昭和18年調査時の後円部側の様相について、赤星氏が克明に記録していることが改めて判明した。これらはいずれも瀬戸ヶ谷古墳の埴輪配列等を検討する際の元資料になり得る、極めて貴重な資料と言えるだろう。改めてノートの全容を把握した上で検討を行いたい。

[掲載図書]

『神奈川県史』資料編20 考古資料 1979

(植山)

参考文献

- 三木文雄「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会
石野 映「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（2）」『日本考古学年報3』昭和30（1955）年 日本考古学協会

年報番号 横須賀市03277 長井堅穴 横須賀市長井5丁目

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月日]

昭和25年5月30日

[資料保管場所]

資料中には「横須賀考古学会蔵」とあるが、現在は玉泉考古館に保管されている。

[記載内容概略]

今回紹介する資料は、図面1枚、スケッチ図1、実測図4枚、スケッチ1枚、写真1枚で、横須賀市博物館の封筒に入っている。

図面は、堅穴住居跡の断面図と平面図で、「横須賀市長井字内原（弥生式）堅穴実測す 昭25.5.30」と表記されている（第5図）。住居の規模は、北辺434cm、東辺413cm、南辺426cm、西辺387cmで隅丸方形を呈しており、表土からの確認面は29cm、住居底面までは46cmと記載されている。住居のやや東に90cm×110cmの範囲で焼土が検出されている。住居の中央付近に埴輪脚部、台付き甕の破片、東隅には台付き甕、北隅には礫と脚部を欠く高壙、南隅には埴輪の破片や鉢底などが出土している。この図面と同様な内容のスケッチが描かれている（第6図）。

実測図は、台付き甕、高壙、異形器台、鉢の4点で、壺の口縁はスケッチ風に描かれている。

台付き甕の法量は、高さ25cm、口縁18cm、器台部底径10cmで、「弥生式 脚は埴輪土器」と記されている（第7図）。

高壙の法量は、口縁14cm、高さ14.2cm、クビ3.4cm、下22.3cmで、調整については「クシ目が残る 全体にヘラミガキ」と記されている（第8図）。脚部のすかしは「3ヶ所」とあり、「下9/10欠」と記されている。また図面には、「横須賀長井、新宿 市立病院分院前」「長井中学校周辺市立分院前出土」と記載されている。

異形器台の法量は、上14.6cm 高12.2cm 下11.8cm、下クビcm、4.1（下から5.8）cmで、調整については内外面ともに「ヘラ仕上」と記されている（第9図）。また、「口辺4/4欠」、口縁には「穴4ヶ所」、脚部に「穴4カ所」と表記されている。図面には、「横須賀市長井、新宿、市立病院分院前 長井分院前出土」とあり、所蔵者が郷土史家の「玉泉正夫」と書かれている。

鉢には、法量や調整に関する記述はなく、「新宿旧分院前 1963」と書かれている（第10図）。

壺の口縁はスケッチで、法量や調整に関する記述はない（第11図）。口縁に棒状浮文が貼付されており、口唇部と口縁下部、頸部の突帯に刻み目が表現されている。「長井分院裏」と記載されている。

写真は4枚で、すべて同じ台付甕である（写真1）。それぞれにコメントが記入されており、「市内 長井分院前 畑 堅穴出土」や「（脚付甕形土器）（横須賀考古学会蔵）（横須賀市長井出土）」「（横須賀長井堅穴出土）横考」などと記載されている。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

発掘調査の概要及び経緯に関しては、赤星氏1950に詳しい。発掘までの経緯については、赤星氏が昭和24年12月初旬に長井の知人を訪問した際に、近所に土器らしきものが出土していることを聞いたことに端を発する。12月11日に横須賀考古学会のメンバーと現地を踏査し、病院前の麦畑で広範囲に土器が分布し

ていることを確認し、その後30日に横須賀考古学会のメンバー3名で発掘調査を実施した成果と見られる。調査はまず、幅60cm、南北5mのトレンチを深さ46cmまで掘削したところ、弥生土器が出土した。その後、トレンチ調査を継続したところ、竪穴住居の発見に至る。竪穴は4m四方の隅丸方形を呈し、耕作下17cmほど掘り込まれていた。東隅では完全な形の土器1点、南隅からは数個の土器片（埴）、西端では凝灰岩塊7～8個がかたまって見つかり、傍らには脚部の欠損した高坏が見つかっている。竪穴中央部では、床面から15cmほど上で「前野町期」に属する埴1個体分が散在して見つかった。同じ高さで焼土が1m×50cmの範囲で見つかったが、これは竪穴住居埋没後の所産と見ている。まとめとして、本竪穴住居は弥生時代の所産で、その広さは8畳敷に等しい。この穴の上に藁葺き屋根が作られたもので、農家の1棟にあたる。出土土器から弥生時代末の「前野町期」ものと見られ、「その古さはおよそ2000年前と思われる。」と記されている。しかし、これらの遺物や図面については掲載されていない。

[掲載図書概略]

先に触れた調査に関する概要是記されているが、遺構図や写真などの掲載はない。遺物の実測に関しては、横須賀市史に掲載されている（中村2010）（第12図）。

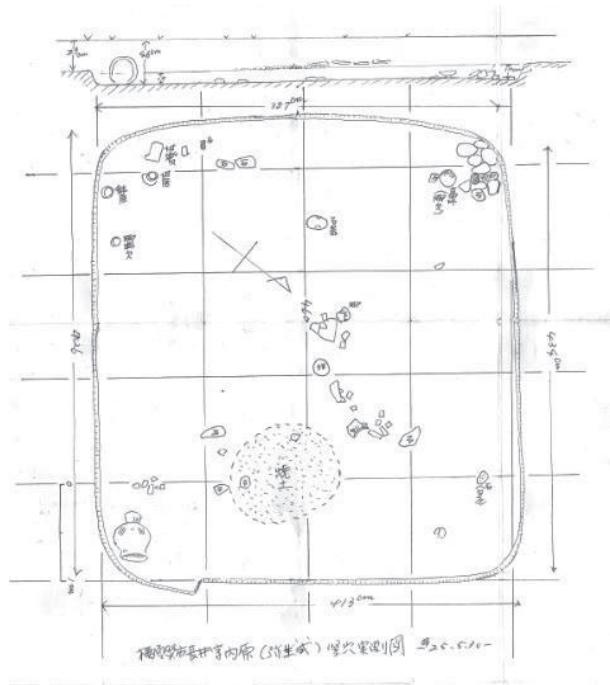
中村勉 2010 「長井町内原遺跡」『新横須賀市史』別編考古 横須賀市

[小結]

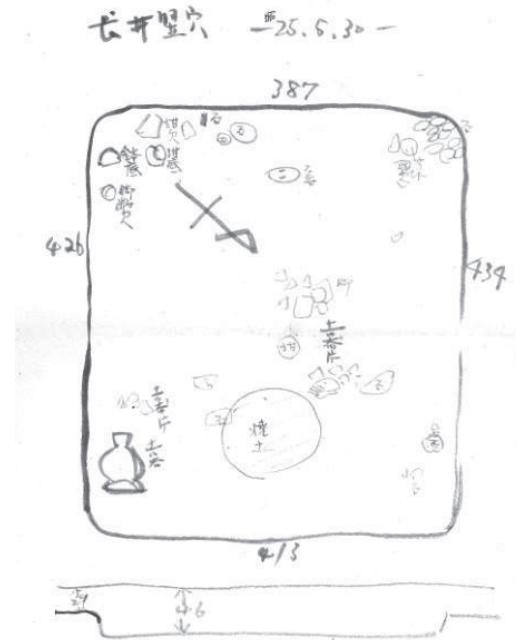
これらはすべて、古墳時代初頭から前期に帰属する土器である。長井内原遺跡は、古墳時代初頭から前期の大規模集落で、これらの資料は同遺跡の資料を補完する遺物と考えられる。（新山）

引用・参考文献

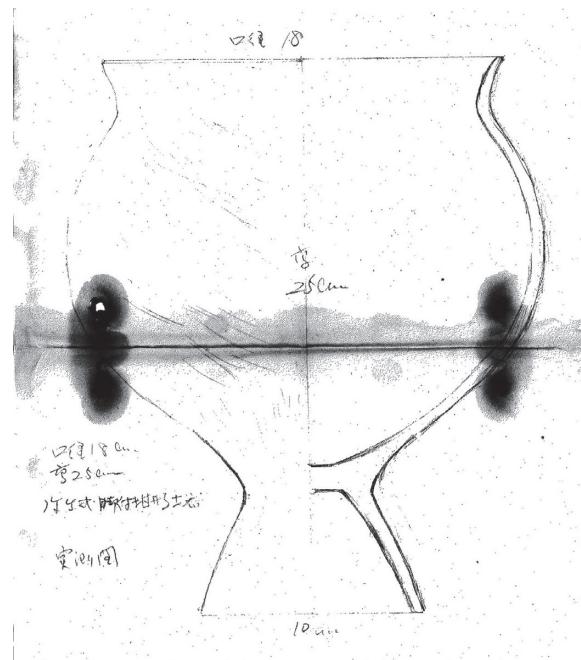
- 赤星直忠 1950 「長井竪穴発掘覚書」『三浦半島研究会会報』第2号 三浦半島研究会
赤星直忠 1955 「神奈川県横須賀市長井遺跡」『日本考古学年報』3 日本考古学会
大塚真弘ほか 1982 「長井町内原遺跡」『横須賀市文化財調査報告書』第9集 横須賀市市教育委員会
中村 勉 2010 「長井町内原遺跡」『新横須賀市史』別編考古 横須賀市



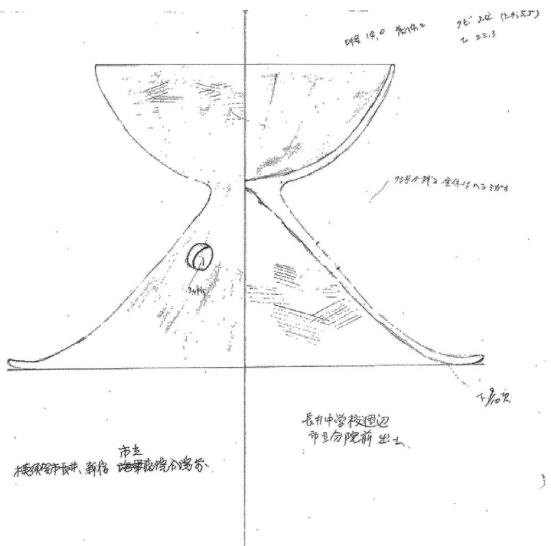
第5図 住居跡の図面



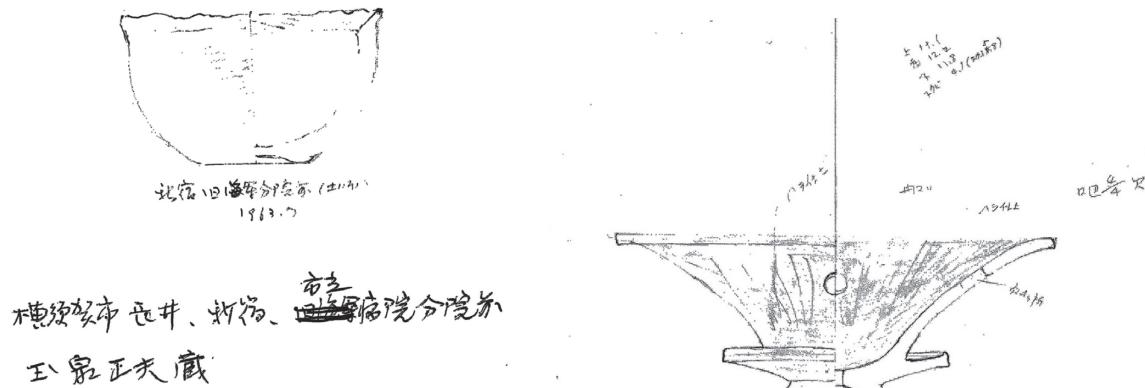
第6図 住居跡のスケッチ



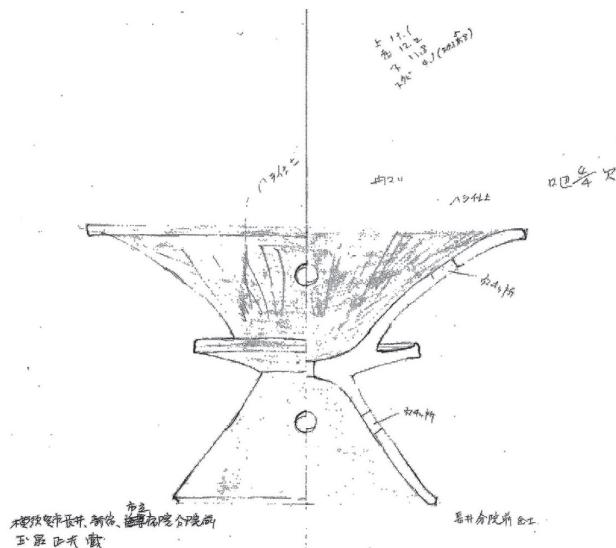
第7図 台付き甕



第8図 高壙



第10図 鉢



第9図 異形器台

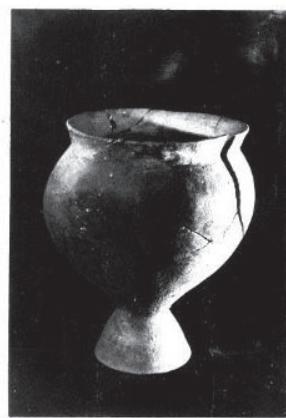
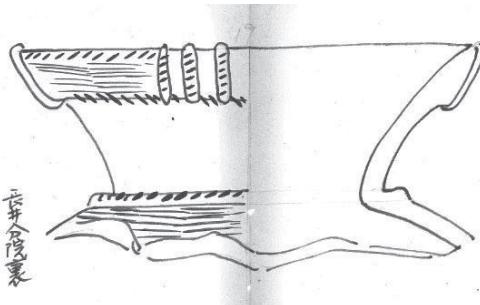
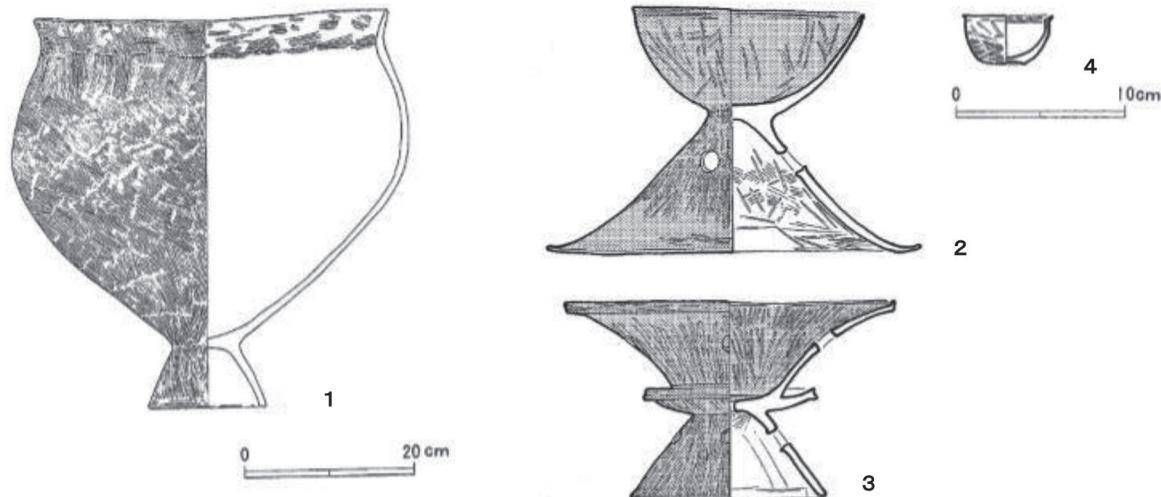


写真1 台付き甕
(附脚付圓形土器)(大井古墳考古学会蔵)
大井古墳院令院跡

大井古墳院令院跡



第11図 壺の口縁



第12図 出土遺物 (1:台付き甕、2:高杯、3:器台、4:鉢)

年報番号 横須賀市03470 こんぴら山古墳・ふくざく谷横穴群 横須賀市久里浜

1. 赤星ノートの内容

[調査年月日]

昭和32年11月4～10日。

[資料概略]

資料は、こんぴら山古墳とふくざく谷横穴群の発掘調査記録一式であり、昭和32年より開始された東京電力久里浜火力発電所の建設工事に先立って横須賀市博物館（当時）が調査を実施した。赤星氏はこんぴら山古墳の調査を担当している。

資料1は、こんぴら山古墳および横穴群の位置図。「1/25000地形図より」とメモされた久里浜湾南岸の簡略地図で、火力発電所建設に伴う丘陵切り崩しおよび埋め立て地造成以前の海岸線がわかる。墳丘の所在する丘陵突端にはこんぴら社跡を示したものであろう鳥居マークが描かれ、標高値と思われる数字「64.5」が記される。資料2は、こんぴら山の遠景スケッチ。久里浜湾から南方のこんぴら山を望み、山頂にわずかに盛り上がる墳丘を分かり易くやや濃く描いている。資料3は、こんぴら山の遠景写真。資料2と同画角で撮影されたもの。この写真でも墳丘を確認することができる。資料4～8は、発掘調査概報の原稿および挿図。所在地概略図の描かれた表紙と原稿4ページ。こんぴら山古墳の墳丘断面図。ふくざく谷横穴群の様式図と出土須恵器の復元図が冊子状に綴じられている。資料9は、ふくざく谷横穴群東1号横穴出土こはく棗玉断欠の原寸実測図。絵の具を用い琥珀色に色彩される。資料10は、こんぴら山古墳の平面（等高線）図およびトレンチ配置図。複数本のトレンチが墳丘および南側の平場に縦横に配され、確認された盛土高や地表から地山までの深さが各所に書き込まれている。資料11は、ふくざく谷横穴群の出土土器形態図。資料12～25は、発掘調査の記録写真。古墳および周辺の立地や墳丘盛土断面の状況、横穴群出土遺物などが写されている。

なお、本稿での掲載は省略するが、この他に発掘調査に係る取り決め等の書類が同封されていた。

2. 記載資料の整理

[遺跡概要]

こんぴら山古墳は、久里浜湾の入口南岸、東京湾に向かって突出する標高60m余りを測る丘陵先端頂部に築造された前方後円墳で、墳頂部にかつてこんぴら社があったことからこんぴら山と呼称されている。主軸方位は東南東～西北西。後円部を東方の海側に配する。墳丘規模は全長約34m、後円部直径約15m、前方部幅約11m、前方部高約2.5mを計測。小型ではあるものの古墳時代後期において三浦半島最大規模を有している。おそらく江戸時代末期頃のこんぴら社建設時に後円部上半が大きく削平されたことによって埋葬施設は遺存しておらず、葺石や埴輪、共伴遺物も出土していないが、旧表土を残してその上に丘陵基盤を削り取った岩塊と黒土を混合した明瞭な盛土が確認されており、その状況は資料7や資料19・20にみることができる。築造時期は不詳であるが、赤星氏は自身が昭和27年に調査したこんぴら山古墳の北西方約3.5kmの古久里浜湾奥に所在する大塚1号墳との墳丘規模・形状・主軸などの類似点から、大塚1号墳と大きく異なる築造年代（6世紀後葉～末葉頃）を想定している。

ふくざく谷横穴群は、こんぴら山南側の山腹に当時12穴以上が確認されており、安全面の考慮から調査可能であった8穴の調査を実施している。横穴様式や出土遺物の組成から、この谷地における横穴の築造は7世紀後半にはじまり8世紀末まで継続的に行われたとの報告がなされている。

[掲載図書]

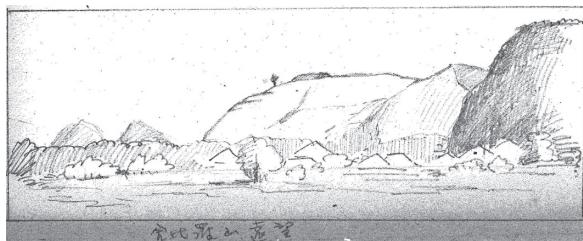
- 赤星直忠 1958 「横須賀市久里浜こんびら山古墳並横穴群調査概報」『かながわ文化財』第12号 神奈川県文化財協会
 赤星直忠 1958 「横須賀市久里浜こんびら山古墳並横穴群調査概報」『横須賀考古学会年報』第3冊 横須賀考古学会
 赤星直忠 1959 「こんびら山古墳とふくざく谷横穴群」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第3号 横須賀市博物館
 横須賀市 2010 「こんびら山古墳」『新横須賀市史 別編 考古』

[小結]

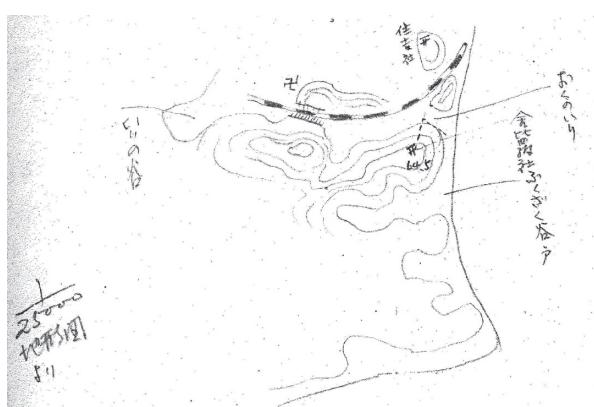
こんびら山古墳の所在する古久里浜湾沿岸には、八幡神社古墳群、蓼原古墳、大塚古墳群といった多くの古墳が築造されており、5世紀末葉～7世紀前葉にかけて湾入口部の南岸砂州上から湾奥の丘陵上へと立地を移す継続的な造営が認められる。こうした傾向のなか、赤星氏がこんびら山古墳との類似点を指摘する大塚1号墳は最も湾奥に6基の古墳群を形成するのに対し、こんびら山古墳は東京湾に突出した丘陵突端の頂部に単独で築造されており、ともに古墳時代後期において三浦半島最大規模を有する前方後円墳でありながら、こんびら山古墳が立地的な特異性を示していることに注目できる。近年発見された三浦半島相模湾沿岸の丘陵尾根筋に築造される長柄桜山古墳群（4世紀後葉の築造）は、その立地などから海上あるいは水上交通の要衝に見せる目的で築造された海浜型前方後円墳（3）と考えられており、造営の背景には畿内地域と関東以北を結ぶ海上ルートとの関係が推定されている。こんびら山古墳は県内最大級を誇る長柄・桜山古墳群に比して規模が小さく葺石・埴輪なども確認されていないが、これを時期的な推移としてその立地特性に限ってみれば同古墳も海浜型前方後円墳と捉えることができよう。北方至近の横須賀市走水は三浦半島を横断して浦賀水道へ抜けたとされる宝亀二年以前の古東海道の推定伝路にあたり、古久里浜湾に注ぐ平作川は三浦半島最長の河川で流域に古墳群が築造される状況から水上交通路として利用されていたことが想定できる。三浦半島における各期の海浜型前方後円墳のありかたを考える上で、本資料は開発によって地形改変がなされてしまった古墳の貴重な記録と言えよう。（長澤）

引用・参考文献

1. 横須賀考古学会 2003 『三浦半島考古学辞典』
2. 横須賀市 2010 『新横須賀市史 別編 考古』
3. 公益財団法人かながわ考古学財団 2015
『海浜型前方後円墳の時代』
4. 田尾誠敏・荒井秀規 2017 藤沢市史ブックレット 8
『古代神奈川の道と交通』



資料 1



資料 2



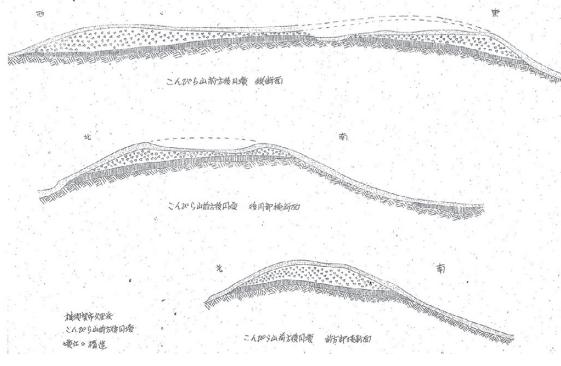
資料 3

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（15）

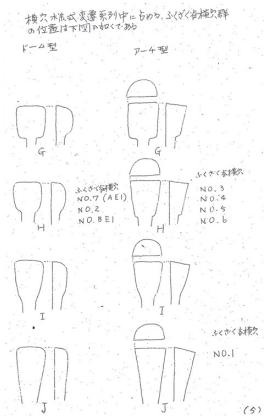
資料 6

資料 5

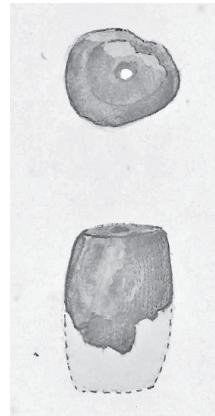
資料 4



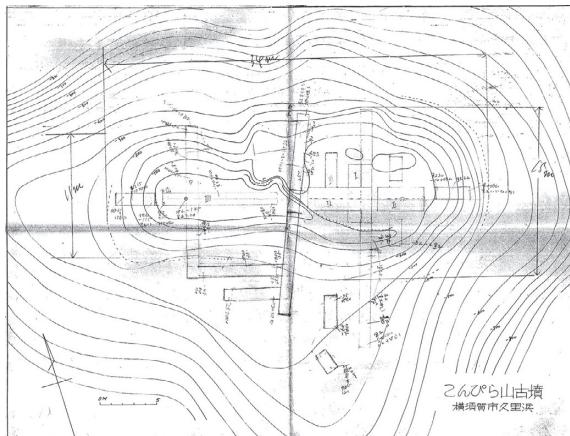
資料 7



資料 8



資料 9



資料10



資料11



資料12



資料13



資料14



資料15



資料16



資料17



資料18



資料19



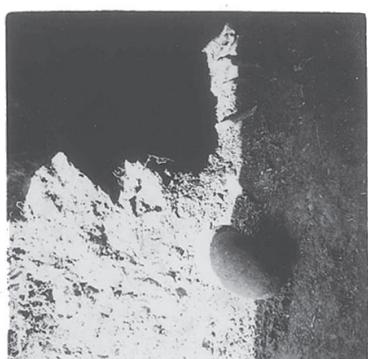
資料20



資料21



資料22



資料23



資料24



資料25

年報番号 横須賀市03573 鳥ヶ崎横穴群 横須賀市鴨居

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

昭和42年1月20日頃

[資料概略]

資料は横須賀市に所在する鳥ヶ崎横穴墓群調査に係る概報である。同封された資料から本概報は昭和42年4月に神奈川県に提出されたものと考えられる。

2. 記載資料の整理

[遺跡・資料概要]

鳥ヶ崎横穴墓群は大正22年に土取り工事の最中に発見された、横須賀市鴨居2丁目に所在する東京湾岸最大規模の横穴墓群であり、6世紀末葉8世紀前葉頃に年代づけられる約60基の横穴墓が構築されていたとされる。丘陵東側の横穴墓群は大正期の土取工事によって消滅し、現在では南斜面の横穴墓群が一部残るのみである。これらのうち15基は、大正11（1922）年から昭和42（1967）年までにかけ、赤星氏らによつて4回の調査が実施された。出土した遺物は東京国立博物館、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館に保管されているが、ほとんどは横穴墓の帰属が不明である。

本資料は昭和42年に調査された横穴墓6基についての報告書である。調査の経緯、各横穴墓の事実記載と出土遺物、横穴墓の時代についての所見が記載されている。添付図は調査地点の略図と各横穴墓の平・断面図（いずれも目測、聞書、略測との記載あり）である。これらの横穴墓は、海上自衛隊構内での道路新設に伴い山腹を切り崩した際に発見され、横須賀市教育委員会により連絡を受けた赤星氏らが調査を実施したものである。この横穴墓群は赤星氏によって大正11・14年、昭和元年に発掘調査された横穴墓群の南側に位置するもので、上下2列で構成されている。

上記のように鳥ヶ崎横穴墓群から出土した遺物についてはほとんどが帰属不明であるため、『新横須賀市史 別編 考古』「鳥ヶ崎横穴墓群」では数点の遺物を除き、その出土遺物を「鳥ヶ崎横穴墓群一括出土」として記載している。このうち、本資料中で紹介されている5号穴から出土した銅鉗1点については、先に調査された横穴墓からの出土記録がないことと本資料による記述内容から、図38-3：10である可能性が高い。

[掲載図書]

赤星直忠 1967 「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」『横須賀考古学会年報』第12冊 横須賀考古学会

[掲載図書概要]

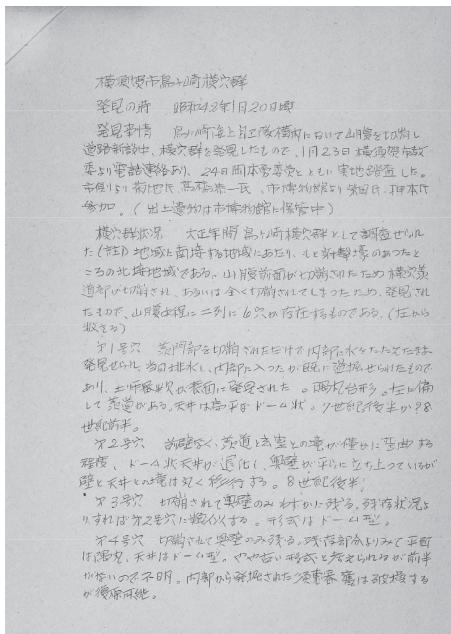
昭和42年に刊行された横須賀考古学会の年報である。本資料とは句読点や文章に一部差異が見られるが、「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」として掲載されている。

2. 小結

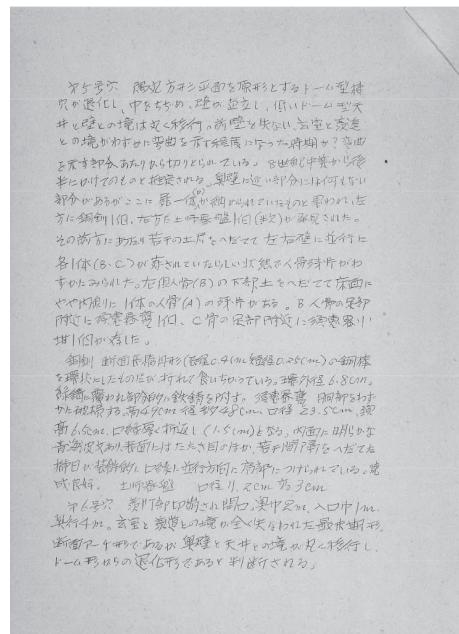
本資料は鳥ヶ崎横穴墓群の調査報告書の原稿である。これまで「赤星ノート」を紹介してきた中でも、横須賀市に関する資料として鳥ヶ崎横穴群の資料を数点紹介してきた。赤星氏著「穴の考古学」では、この横穴墓群が同氏の横穴研究の出発点とされていることからも、その資料の重要性が伺える。 (吉澤)

引用・参考文献

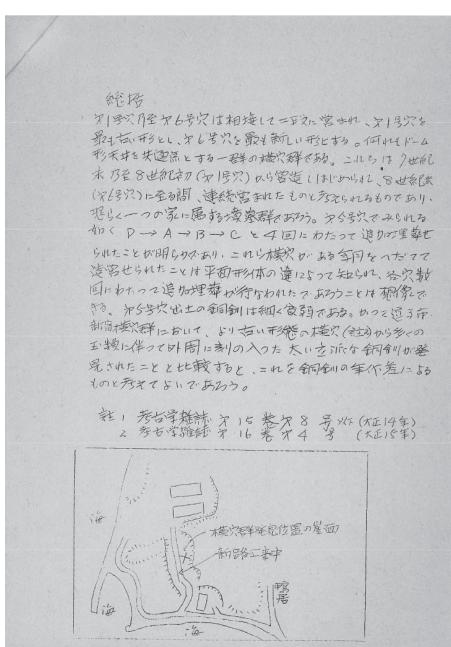
- 赤星直忠 1924a 「鴨居洞穴の発掘」『考古學雑誌』第14巻第12号 日本考古学会
- 赤星直忠 1924b 「其後の鴨居洞穴の発見遺物」『考古學雑誌』第14巻第13号 日本考古学会
- 赤星直忠 1925 「相州鴨居の横穴（一～三）」『考古學雑誌』第15巻第8・9・11号 日本考古学会
- 赤星直忠 1967 「横須賀市鳥ヶ崎横穴群」『横須賀考古学会年報』第12冊 横須賀考古学会
- 赤星直忠 1970 『穴の考古学』 学生社
- 横須賀市 2010 『新横須賀市史 別編 考古』 横須賀市



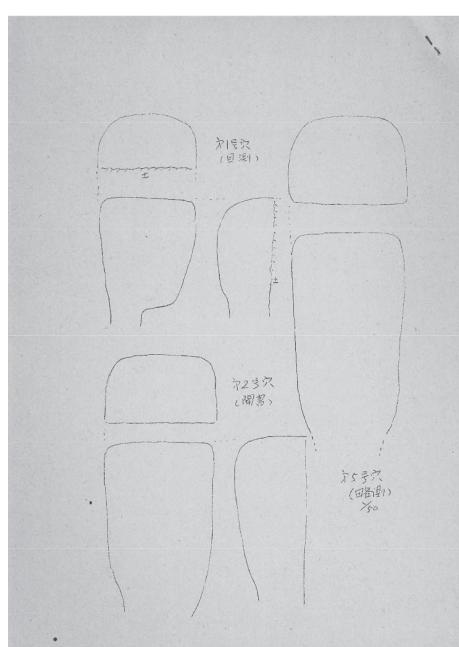
第13図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書 1



第14図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書 2



第15図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書 3



第16図 鳥ヶ崎横穴墓群報告書 4